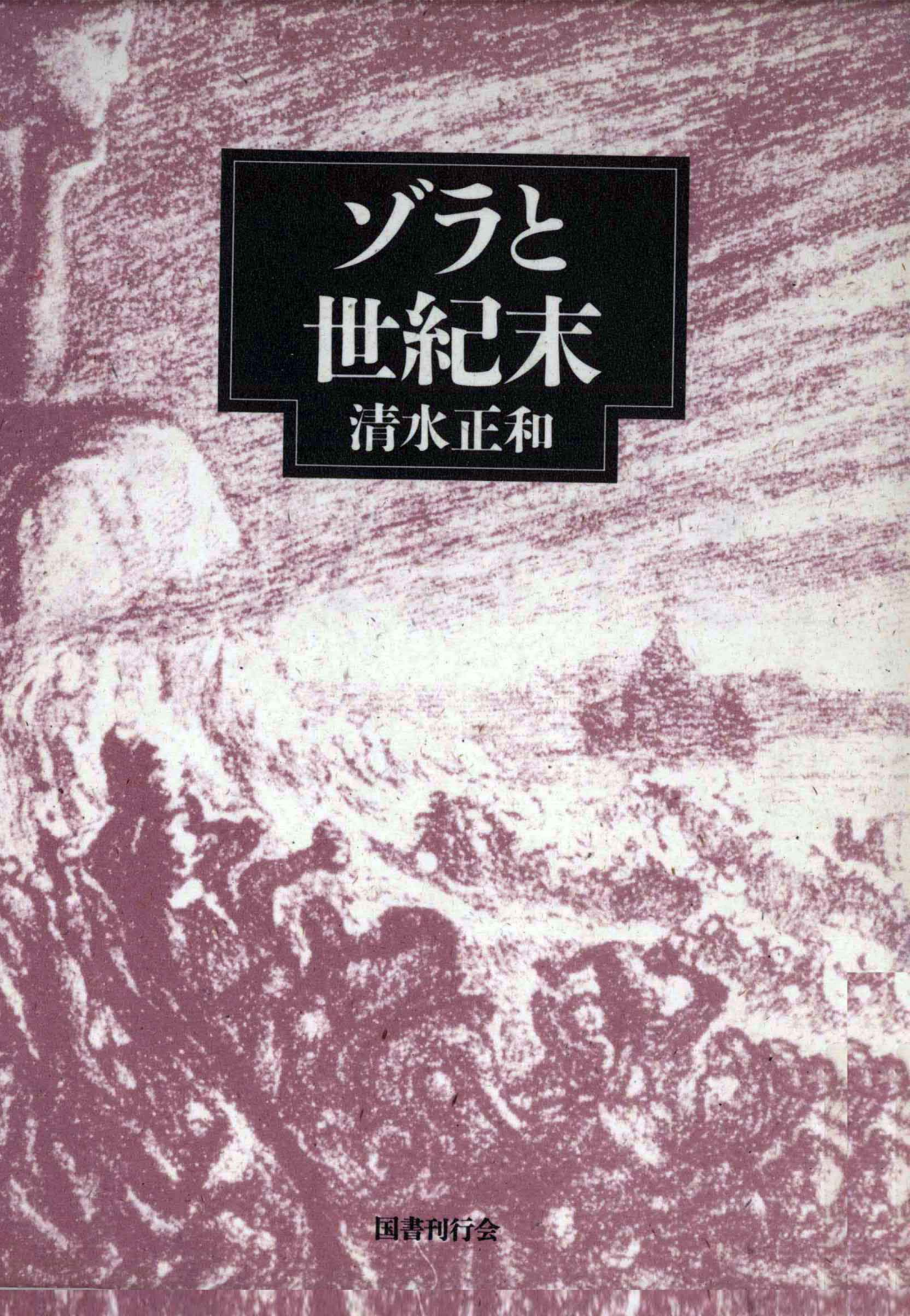




ゾラと 世紀末

清水正和

国書刊行会

清水正和（しみずまさかず） 1927年和歌山県生まれ。
第四高等学校文科、京都大学文学部フランス文学専攻卒。
現在、甲南女子大学文学部教授。「現代文学」同人。主要
著訳書——『西欧幻想—冬の旅』、『ことば・声・夢』以上
皆美社、『フランス文学史』（共著）白水社、『フランスの文学』
（共著）有斐閣、M. ホフマン『プロコフィエフ』『ショスタ
コーヴィチ』（共訳）、S. ドゥマルケ『ベルリオーズ』
（共訳）以上音楽之友社、J. ヴェルヌ『海底二万海里』
『神秘の島（上・下）』以上福音館書店、後者で1979年第1
回旺文社児童文学翻訳賞受賞。

ゾラと世紀末

1992年3月30日初版第1刷発行

著 者 清水正和

発行者 佐藤今朝夫

発行所 国書刊行会

東京都豊島区巢鴨3-5-18 郵便番号 170

電話 03-3917-8287 Fax. 03-3940-2653

振替 東京5-65209

印刷 セイユウ写真印刷株式会社

製本 青木製本

ISBN4-336-03342-0

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

ゾラと
世紀末
清水正和

ゾラと世紀末
目次

ゾラと世紀末

I 世紀末の叙事詩人ゾラ（序論）

9

自然主義作家ゾラの詩人性

11

狂気と崩壊の叙事詩「ルゴン＝マッカール」

15

理想の渴望と闘い

19

II 二つの自伝的作品

21

1 『クロードの告白』——青年ゾラの詩と真実

24

作品の成立事情

24

苛酷な青春体験

28

二通の手紙

30

2 『制作』——創造の秘儀と内面ドラマ

39

草案にみるゾラの内面ドラマ 41

作品のあらすじ・時代背景 47

クロードとサンドーズ 52

「クロードの死」の幻想的演出と着想源——セザンヌの詩とモローの『まぼろし』

青春の埋葬と「生」の渴仰 78

ゾラとセザンヌの友情の記念碑 91

Ⅲ 書き出しと終行——「ルゴン＝マッカル」の場合 97

1 『居酒屋』と『ナナ』 102

「期待」attendreの小説『居酒屋』 102

「空無」videの神話『ナナ』 107

2 『ジェルミナル』と『大地』 118

記録小説から象徴的神話に 118

両作品の主題と性格 119

同一場所・同一人物の設定 122

「前進」marcherの小説『ジェルミナル』 124

『大地』における結末 126

両作品の結語〈a terre〉——大地への夢想 130

3 シリーズの結語〈a vie〉(生) 134

IV 幻想と神話 139

1 幻想小説『夢』 141

「ルゴン＝マッカル」双書中の抒情的・哲学的小説 141

作品のあらすじ 145

対置と照応 149

「反復と変奏——「白」の交響詩 155

ゾラの「夢と現実」 162

2 「金」と「愛」の神話『オ・ボヌール・デ・ダーム百貨店』 166

作品の成立事情 166

『こった煮』からの異質的展開 172

作品のあらすじ 176

叙事性と抒情性 178

擬人法と対置法 180

あとがき

267

初出一覧

274

参考資料

エミール・ゾラ年譜 付 関連図版・写真

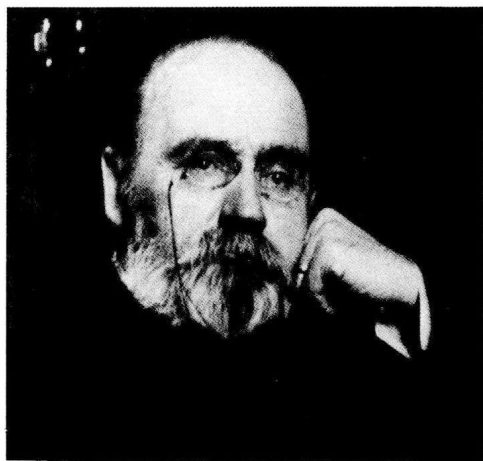
277

主要作品紹介 付「ルゴン＝マッカール家系樹」の人々

作品目録

主要研究文献目録

I
世紀末の叙事詩人ゾラ
(序論)



「ナナの死はミケランジェロ的だ！ 巨大な作品だよ、きみ！ 『ナナ』は現実性を失うことなく神話にまでなっている。まさにバビロニア風の創作だ」

——フロベール（一八八〇・二・十五、ゾラへの手紙）

「ゾラは創造する。かれは事物の前に鏡をかざしているのではない。かれは驚くべきものを創り上げている。へ創造し、詩化しているのだ。だからこそあのように美しい。自然主義にせよ、レアリスムにせよ、ロマン主義と大いに関連をもっているのだ」

——ゴッホ（一八八五、弟テオへの手紙）

自然主義作家ゾラの詩人性

明治以来、わが国でもエミール・ゾラ（一八四〇〜一九〇二）の名は、モーパッサン（一八五〇〜一八九三）とともにフランス自然主義作家の代表人物であり、『居酒屋』や『ナナ』の作者として、あるいは十九世紀末フランスの国論を二分したドレフュス事件における擁護派の立役者としてよく知られている。

普仏戦争と第二帝政の崩壊（一八七〇）、パリ・コミューンの成立と壊滅、第三共和制の発足（一八七二）、世紀末のドレフュス事件、と史実を列挙しただけでも明らかなように、近代フランスの激変期であった十九世紀後半の全体にわたるその生涯を通じ、ゾラはきわめて多面的な活動を精力的に行った作家で、ひとくちでは定義しきれない多くの側面をもっている。彼の膨大な作品、文学・美術・社会の各分野に及ぶ論説、数多くの手紙など、それら彼の書いたものに反映しているゾラという人間の資質を考えた場合、「科学者の現実観察者」「詩人的夢想家」「冷徹な分析家」「情熱的人道主義者」「ペシミスト」「楽天主義者」「激越な闘士」「修道土的宗教家」など、相互に二律背反的な意味合いをもつゾラ像がさまざまに思い浮かぶものである。これらのゾラ像を整理していえることは、ゾラの中における科学者と詩人の混在・共存である。

科学者ゾラの側面は、遺伝法則の創作への適用とか、「実験小説」という彼の主張との関連で従来よく指摘されてきたが、実作品に大きく関与している彼の詩人性は絶対に無視できないゾラの一面である。実際に彼の作品に接したと

き、彼の科学的主張は独自性を誇示するために行った多分に宣伝的なものであり、むしろ詩人性が彼の本性であるという印象すらわれわれは抱くものである。だが公平に見て、彼の作品群は、科学者ゾラと詩人ゾラの協力で構築された壮大な叙事詩であるといえよう。この事から、同時代の他の自然主義作家とくらべてゾラの特質はといえば、並はずれた叙事詩人性といつてまちがいないだろう。

元来、芸術作品は個性的なものである。前代のレアリズムを極限にまで押し進めた一流派として分類し説明される自然主義の作家たちも、ゾラをはじめモーパッサン、ドーデ、ユイスマンス、ミルボー、ルナール……と具体的にそれぞれの作品に接すれば、じつに個性的であり、ひとくちで一括定義できるものではない。総じて十九世紀の作家・詩人の作品に関しては、ロマン主義とかレアリズム、自然主義、象徴主義、神秘主義と、あまりに器用に分類されすぎた文学史的レッテルにまどわされずに読むべきであるだろう。ゾラにしても、見方によれば、右に列挙したレッテルのいずれにもあてはまる要素をもっているといえる。

作家・芸術家にかぎらず、もろもろの人間の生成の源ないし秘密は、それぞれの幼少年期や青春期に秘められていることが多い。ゾラの場合も例外ではない。彼のつよい科学的関心、そして作品の壮大な構築や厳密性は、おそらくイタリア人土木技師であった父親ゆずりであろうが、一方彼の豊かな詩人性の由来をたずねた場合、それは彼が三歳から十八歳まですごした南フランスの古いローマ時代からの町エクス・アン・プロヴァンスでの時期にあるだろう。

周知のように、ゾラはこのエクス時代に、現代絵画の父となるセザンヌおよび後年の数学者バークユと固い友情を結び、半獣神のように山野をかけまわり、ユゴーやミュッセ、ヴェルギリウスの詩に心酔、ロマンチックな夢想と詩作にふけるといふ牧歌的な生活をすごした。七歳の時、エクスに運河を構築中の父が急死、以後貧困の母子生活であったが、この時期に養われた感性が、後年の作家ゾラの作品創造における一大原動力となっていることは否定できない。いわば詩神の洗礼を受けたのであった。光と詩にみちた幼少年時代へのゾラの思慕は強烈である。

「今もまぶたを閉じると現われるもの、それはエクスの町ではない。(……)郊外の小径こみちであり、銀灰色のオリヴ

の木、蟬しぐれに打ちふるえるアマンドの木である。干上がった川、雪道を歩く時のように乾いた土がキュッキュツと音を立てる真白な田舎道である。それはギリシャだった。崇厳そのものの地平に、また岩塊（イサ）のいるいとした淡黄褐色の岩山に照りつける煌めく太陽のあるギリシャだった」

（娘ドニーズ・ル・ブロン・ゾラの『父親回想』）

これは代表作「ルゴン・マッカル」双書を完成した一八九三年、五十三歳のゾラが娘に語った言葉である。終生魂の故郷としてのプロヴァンスの地がゾラの心中でギリシャ的自然にまでイマジユがふくれ上がり、作品のいたるところでわれわれが見ることのできる彼の汎神論的な自然愛の源泉となっていることがよく分る述懐である。

南仏での幼少年期がゾラの詩人性、とくに抒情的感性を養ったとすれば、つづくパリでの青年期は彼を叙事詩人にしたといえよう。

一八五八年、十八歳の時、困窮のはてゾラ母子はエクスを去りパリに出た。それは友との牧歌的生活から、孤独、不安、貧苦という「現実」への急激な暗転であった。翌年、大学入学資格試験（理科）に失敗したゾラは、文学で身を立てることを決意し、屋根裏生活の中で挫折感・絶望感にさいなまれながらも、ひたすら詩人になることを夢み、詩作にふけた。しかし一八六二年、生活の窮乏からアシェット書店に就職したことが一大転機となる。いわゆるロマンチックなボヘミアンの夢想期から後年の自然主義作家ゾラの形成期に入ったのである。

書店勤務を通じて文壇事情への開眼、フロベールやゴンクール兄弟の文学に現代的意義の発見、そしてテーヌの「種族、環境、時代」による決定論やクロード・ベルナールの実験医学論への傾倒と独自の科学的文学理論による武装に着手、韻文から散文への転向、新聞への挑発的で斬新な文芸評論の盛んな投稿……といったところが作家ゾラ形成期の主要経過である。だがここでやはり注意しなければならないのは、ゾラがロマン主義を清算してリアリスト、ナチュラリストになったとする図式的な即断だろう。たとえ衣替えはしても生身の転向は決して単純なものではない。不倫の妻による陰惨な夫殺しを主題とする作品『テレーズ・ラカン』（一八六七）——ゾラ自身「病理学的研究作

品」と誇示した——は、まさしく自然主義作家ゾラの誕生を告げるものであるが、これに先立つ彼の最初の小説『クロードの告白』は注目に値する作品である。作家ゾラ生成の秘密、ひいてはゾラの本質を知る上で貴重な資料となる作品と考えるからである。たとえばゾラ研究家のアンリ・ギュマンはこう述べている。『クロードの告白』以上にくわしくゾラが自分の秘密を、心の奥底を書いたものはないだろう。私はゾラの本質は全生涯を通じて不変だと信じる。『クロードの告白』は、他のどの作品よりも、かくされたゾラ、ゾラの本質への接近を可能にしてくれる」

前年の一八六四年に刊行した処女短編集『ニノンへのコント』は、南仏の架空の恋人に語るゾラのロマンチックな心情と恋の夢にあふれるお伽噺であったのに対し、『クロードの告白』は、貧しい一青年と娼婦の物語というきわめて現実的な主題の作品である。（本書Ⅱの1参照）

ゾラは、ボヘミアンの夢想期の二十歳の頃、ベルトという一娼婦としばらく同棲していた。この作品はその体験に基づくゾラの心情告白小説である。いわば青年ゾラの『感情教育』ないしは『詩と真実』であり、彼はこれを友のセザンヌとバリュに献じている。

よくできた顔に子供のようになまいなく笑う詩人の喜びも、もう感じない。兄弟よ叱ってくれ。詩句の韻がうまうまいかないたため眠れないなんてもうなくなった。（……）

卑怯で残酷なことをしながら依然として誠実であり続ける、この世間にはそんな芸当のできる人間もいるものだ。（……）

ぼくの魂は光にあこがれているのに、光の中にのぼって行けない。そして光を侮辱するために、ぼくは汚物の中で長々と寝そべっている。（……）
（『クロードの告白』）

薄暗い屋根裏からたたきつけるようなこれらクロードの言葉の裏に、夢と現実、光と汚物、天使と悪魔に引き裂か

れた青年ゾラの叫びが、さらに、偉大な俗物、偉大な悪魔になることを自虐的に決意するゾラの逆上した心情が、痛いほど読みとれるものである。

今日ぼくはあわれな少年の手記を出版するが、きみたちはその少年をよく知っていた。その少年はもはやいない。かれは自らの青春の死と忘却の中で成長していったのだ。
(作品冒頭のセザンヌとバールユへの献辞)

青年の気負いにみちたこの言葉から、ゾラが現実世界へ新たな決意をもって出発するため、ロマンチズムにひたっていた自らの青春に死亡診断書をつきつけようという意図が読みとれる。しかし、荒々しく否定したつもりのロマン主義が生涯を通じて彼の作品創造と社会的行動の強力な原動力として生き続けたのも事実である。そういう点から、『クロードの告白』は、青春における苛酷な現実体験から、ゾラの心中で燃え上がった一種の闘争的ロマンチズムによる感傷的ロマンチズム清算の書であるといえるだろう。そしてこの闘争的ロマンチズムが終生ゾラの中に強力に生き続けるのである。

この作品を契機に、ゾラは単なる抒情詩人でなく叙事詩人となり、現実の泥沼の中から自らの生きる第二帝政社会と対決し、狂暴にその汚辱と偽善を告発することを決意した。その決意と野望から生み出されるもの、それはいうまでもなく「ルゴン・マッカル」双書である。『クロードの告白』発表の翌年、ゾラはアシェット書店をやめ、ペンのみによる生活に入ってしまった。

狂気と崩壊の叙事詩「ルゴン・マッカル」

二十代後半におけるゾラの野望の前にあるのはバルザックであった。ゾラは、バルザックが世紀前半の社会を『人